

『風土記』におけるオホナムチ・スクナビコナ説話の特徴

末 森 裕 美

一 はじめに

オホナムチとスクナビコナは記紀では共に国作りをした神として登場する。この二神は、「記紀以外の文献にこの二神ほど多くあらわれる神は他にない」^(注1) や「広く民間伝承の中で息づいた」^(注2) と指摘され、『風土記』では『出雲国風土記』『播磨国風土記』『風土記』逸文^(注3) においてその名が見える。

このように、オホナムチとスクナビコナは複数の文献にて登場しているが、二神が行ったことについて記紀では国作りをしたとし、それ以上は詳しく描かれていない。『風土記』では各地を巡り山丘を造形するなど、二神の行動が具体的に描かれているが、おおむね記紀の延長線上で語られ、結論としては国作りをしたと理解される。

本稿では、『古事記』『日本書紀』を介さず、『風土記』のオホナムチ・スクナビコナ説話について見る。二神が『風土記』

全体ではどのような存在として描かれているのかについて検討し、二神説話の特徴について考察する。

また、『風土記』ではオホナムチが単独で登場する記事が数多くある。したがって、二神説話で見えた特徴を単独説話と比較し、二神説話特有の特徴があるかについても検討していく。

二 二神説話の指摘と整理

はじめに、二神説話の特徴について先学の指摘を見る。

上代文学全体における二神説話については、大林太良氏が以下のように指摘する^(注4)。

オオナムチとスクナヒコナが一对として行った事業は、「此国を作り堅め」(記)、天下を経営し(紀一書、古語拾遺)なことである。出雲風土記には、「天の下所造らしし大神大穴持の命、須久奈比古の命と、天の下を巡行り給」うた

とある。しかも、オオナムチあるいはスクナヒコナが単独であるいは揃って登場する多くの場合に農耕と関係している。つまり、一対としてオオナムチとスクナヒコナが行ったことは国土を開拓したことであった。

大林氏は二神が登場する際、多く農耕と関係していることから、農耕神として国作りをしたと述べる。この考えは『風土記』でも同様であり、森昌文氏が以下のように述べる^(注5)。

記紀以外の伝承をみると、オオナムチとスクナビコナ二神の結びつきはつよい。(中略) 出雲風(飯石郡)・播磨風(揖保郡)・伊予風逸・伊豆風逸・伯耆風逸^(注6)・尾張風逸では稲種・粟をもたらす農耕の神、または医療の神として、諸国を巡行したと伝えている。大地の神であるオホナムチは(天の下所造らしし大神)として単独で国作りもするが、オホナとスクナとの対偶名でつよく結ばれた二神の伝承は(地)に(農)をひらく、国作りの農耕神的存在となつて広く民間伝承の中で息づいたものとされている。

以上のとおり、二神説話が農耕に関わる内容が多いことから、二神は農耕の神として各地を巡行したと考察される。また、医療との関わりも指摘される。

これらの指摘から、二神説話の特徴は主に農耕とされている

ことが分かる。しかし、『風土記』の二神説話を見ると、農耕に関する記述も、また、医療に関する記述も多くないのである。

国	郡	地域	概要	農耕	医療
播磨国	飾磨郡	宮丘	日女道神と会う	×	×
	揖保郡	稲種山	稲種を山に置く	○	×
	神前郡	聖岡の里	我慢比べ(聖・屎)をする	×	×
出雲国	飯石郡	多祢郷	稲種を落とす	○	×
伊予国		温泉	オホナムチが温泉を用いてスクナビコナを助ける	×	○
(参)尾張国		登々川	二神が足跡を残す	×	
(参)伊豆国		温泉	二神が薬・温泉の術を定め、温泉を造る	×	○
(参)丹後国		凡海	鳥を集めて大きい鳥を造る	×	×
				2	2

図一 『風土記』の二神説話の概要および農耕・医療の傾向

図一は二神が登場する『風土記』八記事の概要をまとめたものである。図一に示したとおり、八記事のうち、先学において指摘される農耕・医療に関する記事は各二記事である。

つまり、二神説話の特徴として主に農耕が挙げられるが、その記事数は医療と変わらない。そして、『風土記』ではどちらの特徴も記事数が多いとは言い難いという問題があるのである。

この問題は二神説話と単独説話との差異にも関わる。差異については、阪下圭八氏が以下のように述べる^{注7)}。

古風土記にみえる大汝・少彦名説話に農事に関するものが多い。(中略)

同じ農事とはいいいながら、稲種や水などの祭祀・呪術につながっていく側面と現実の労働や技術にむすびつく側面とは区別さるべきであり、また実際に風土記における大汝・少彦名説話は大まかながらこの二つの側面に分類することができる。

結論的にいうなら、種に関する説話はすべて大汝・少彦名の併称で語られており、労働や技術につながる説話はほとんど大汝ひとりの所業となっているのである。

阪下氏は二神説話は穀物に関係した内容であり、単独説話は農耕の労働に関係した内容と述べる。しかし、阪下氏が指摘

する二神説話と単独説話の差異は記事数の多くない農耕に限ったものであり、それ以外については言及がない。

したがって、この指摘は『風土記』における二神説話と単独説話との差異の一部分について言及したものであり、全体における指摘ではないのである。

ここまでの内容をまとめる。まず、先学で指摘される二神説話の特徴は『風土記』では記事数の多くない農耕や医療であり、『風土記』全体的に共通するような特徴は挙げられてない。

また、単独説話との差異もその記事数が多くない農耕に着目したもので、『風土記』全体における差異と述べることはできない。以上のことから、本稿では先学で指摘される農耕・医療以外の観点から、『風土記』全体における二神説話の特徴および、単独説話との差異について考察を行い、『風土記』全体における二神説話の特徴について明らかにしていく。

三 二神説話の傾向

では、『風土記』の二神説話において、農耕・医療以外で見える特徴の指摘を見ていく。農耕・医療以外の特徴については、『播磨国風土記』『万葉集』の内容から、『解説出雲国風土記』

にて以下のように述べる（注8）。

両者は播磨国内を巡行し、稲種を落とす。また、両者が我慢比べをしてオオナムチが大地に糞をたれるシーンもある。『播磨国風土記』では特定の山や丘を作り、命名した神として姿を現す点が大きな特徴である。

二神には、漂^漂白の神というイメージもある。たとえば、『万葉集』巻三—三五には、「大汝少彦名のいましけむ志都の石屋は幾代経ぬらむ（中略）」と詠じられている。

この記述を整理すると、まず、山・丘を作ることから「土地の造形」が考えられ、稲種を落とすことから「物・痕跡を残す」という特徴も考えられる。また、巡行することや漂泊のイメージがあるという指摘から、「移動」も特徴の一つだと考えられる。この指摘は『播磨国風土記』『万葉集』の記述によるものであり、『風土記』全体に対する指摘ではない。しかし、この記述を踏まえ、『風土記』の二神説話本文を見ていく。

まず、「土地の造形」だが、二神が土地を造形した記事や内容からその可能性が見える記事は以下の五記事である。

(1) 『播磨国風土記』揖保郡 稲種山

稲種山。大汝命、少日子根命、二柱の神、神前郡望の里生野の岑に在して、此の山を望み見て云ひたまひしく、「彼

の山は、稲種を置くべし」といひたまひき。稲種を遣りて、此の山に積みき。山の形も稲積に似たり。故、号けて稲積山と曰ひき。

(2) 『伊予国風土記』逸文 温泉

伊予国の風土記に曰はく、湯郡。大穴持命、見て悔い恥ぢて、宿奈毗古那命を活けむと欲して、大分の速見の湯を、下樋より持ち度り来て、宿奈毗古那命を以ちて漬浴ししかば、甍が間に活起り居りき。然ありて詠して曰はく、「真に甍し寝ねつるかも」と曰ひて、践み健びし跡処、今も湯の中の石の上にあり。

（『釈日本紀』巻十四「幸于伊予温泉宮」）

(3) 『参考』『尾張国風土記』登々川

尾張国二登々川ト云フ河アリ。菅清公記云。大己貴ト少彦ノ命ト巡国之時、往還ノ足ノ跡ナル故ニ曰跡々。

（『塵袋』十）

(4) 『参考』『伊豆国風土記』逸文 温泉

大己貴と少彦名、我が秋津洲に民の天折ぬることを憫む。始めて禁薬と湯泉の術を制む。伊津の神の湯も又其の数にして、箱根の元湯是なり。

（『鎌倉実記』三）

(5)「参考」『丹後国風土記』逸文 凡海

其を凡海と号くる所以は、古老伝へて曰はく、昔、天下
治めし大穴持神と少彦名神と、此地に到り坐しし時、集海
中の大嶋小嶋を引き集む。小嶋凡て拾を以て壺之大嶋と成
す。故、名けて凡海と云う。当国風土記に在り。

〔海部氏堪注系図〕割注)

(1)では二神が山に稲種を積む。積んだ稲種が山の造形に影響
したかは記述にないが、山の形が変化した可能性は見える。(2)
はオホナムチがスクナビコナを助ける際に^(注9)、大分の湯を伊
予の地まで引いている。(3)では登々川が二神の足跡から生じた
とあり、二神は意図していなくとも結果的に土地を造形してい
る。(4)の二神は「湯泉の術を制め」、伊津の神の湯はその一つ
だとする。したがって、二神が直接この地の温泉を造つていな
くとも、温泉を造る存在であることが分かる。(5)には大島小島
を集め、一つの大島にしたと土地の造形が明確に描かれる。

以上が土地の造形が見える記事である。これらの記事では、
二神は山・丘の造形に限らず、温泉・川・島なども造つており、
造形物に共通性は見えない。したがって、『風土記』全体では、
二神は様々な土地を造形した存在として描かれていると考えら
れる。

次に、「物・痕跡を残す」ことに注目する。該当記事は、土
地の造形と同じく五記事見える^(注10)。

(1)『播磨国風土記』揖保郡 稲種山

〔前掲〕「彼の山は、稲種を置くべし」「稲種を遣りて、
此の山に積みき」

(2)『播磨国風土記』神前郡 聖岡の里

聖岡と号けし所以は、昔、大汝命、小比古尼命と、相争ひ
て云ひたまひしく、「聖の荷を担ひて遠く行くと、屎下ら
ずして遠く行くと、此の二つの事、何れか能く為む」とい
ひたまひき。大汝命曰ひたまはく、「我は屎下らずして行
かむと欲ふ」といひたまふ。小比古尼命曰ひたまひしく、
「我は聖の荷を持ちて行かむと欲ふ」といひたまひき。如
是、相争ひて行きたまひき。数日遅て、大汝命云ひたまひ
しく、「我は忍び行きあへず」といひたまふ。即ち坐て屎
下りたまひき。その時、小比古尼命咲ひて曰ひたまひし
く、「然苦し」といひたまひて、亦、其の聖を此の岡に擲
げうちたまひき。故、聖岡と号けき。又、屎下りたまひし
時、小竹、其の屎を弾き上げて、衣に行ねき。故、波自賀
の村と号けき。其の聖と屎と石と成りて、今に亡せず。

(3)『出雲国風土記』飯石郡 多祢郷

天の下所造らしし大神、大穴持命と須久奈比古命、天の下を巡り行きましし時、稲種此処に墮ちき。故、種と云ひき。

(4) 『伊予国風土記』 逸文 温泉

(前掲) 「践み健びし跡処、今も湯の中の石の上にあり。」

(5) 「参考」 『尾張国風土記』 登々川

(前掲) 「往還ノ足ノ跡ナル故ニ曰跡々。」

(1) では二神が稲種を山に積み、稲種を残している。(2)の二神は我慢比べをし、結果として聖と尿が残り、岩となって今も残ると記述する。(3)では二神は稲種を落とす、(4)は目を覚ましたスクナビコナが足跡が残り、(5)も足跡が川となったとする。

以上から、二神は物(稲種・聖・尿)や痕跡(足跡)を残していることが分かる。残した物・痕跡は稲種・足跡が各二記事で共通のものであるが、基本的に共通性は見えない。

最後に「移動」について見る。二神が移動に関する動作を行う記述が見える記事や、移動に関する動作の記述がなくとも、内容からある地から別の地へ移動した可能性が見える記事は以下のとおりであり、全ての記事にて見られる。

(1) 『播磨国風土記』 飾磨郡 宮丘

大汝少日子根命^(注1)、日女道丘の神と期り会ひましし時、

日女道神、丘に食物、また、宮器等の具を備へたまひき。

(2) 『播磨国風土記』 揖保郡 稲種山

(前掲) 「神前郡聖の里生野の岑に在して」稲種を遣りて、此の山に積みき」

(3) 『播磨国風土記』 神前郡 聖岡の里

(前掲) 「聖の荷を担ひて遠く行くと、尿下らずして遠く行くと」、「相争ひて行きたまひき。数日逕て」

(4) 『出雲国風土記』 飯石郡 多祢郷

(前掲) 「大穴持命と須久奈比古命、天の下を巡り行きましし時」

(5) 『伊予国風土記』 逸文 温泉

(前掲) 「大分の速見の湯を、下樋より持ち度り来て、」

(6) 「参考」 『尾張国風土記』 登々川

(前掲) 「大己貴ト少彦ノ命ト巡国之時、往還ノ足ノ跡」

(7) 「参考」 『伊豆国風土記』 逸文 温泉

(前掲) 「我が秋津洲に民の夭折ぬることを憫む。」「伊津の神の湯も又其の数」

(8) 「参考」 『丹後国風土記』 逸文 凡海

(前掲) 「昔、天下治めし大穴持神と少彦名神と、此地に到り坐しし時」

(1) には「日女道丘の神と期り会ひましし時」とあり、宮丘は

この女神が準備をしていた場所である。したがって、大汝少日子根命が女神の元まで移動した可能性が見える。(2)では二神は当初、神前郡の生野の岑におり、その後、揖保郡の稲種山で稲種を積むことから、二神が移動したと考えられる。(3)の記事では、「遠く行く」という発言と我慢比べは数日間続いていることから、二神が移動していることが分かる。(4)(6)は「天の下巡り行きましし時」「巡国之時」とあり、二神が各地を移動していたことを述べる。(5)では大分の温泉を持ってきたことから、大分へ行ったことがあると考えられ、移動の可能性が見える。(7)には移動に関する記述はないが、二神が「秋津洲に民の夭折ぬることを憫む」とあり、「伊津の神の湯も又其の数」とある。このことから、二神は各地で同様のことをしていたと考えられ、移動の可能性が見える。(8)は「此地に到り坐しし時」との記述から、二神がある場所から凡海に移動したと言える。

以上、先述したとおり、二神説話全八記事いずれの記事においても移動の記述、およびその可能性が見える。また、(4)(6)のように、二神の意志で行っていることが移動のみの記事もあり、移動の目的が見えない記事もある。このことから、二神説話において「移動」は重要な要素であったと考えられる。

以上の内容を図二にまとめる。なお、○はその特徴が記事に

記述されているものを指し、△は可能性が見えるものを指す。

国	郡	地域	概要	土地の造形	物・痕跡	移動
播磨国	飾磨郡	宮丘	日女道神と会う	×	×	△
	揖保郡	稲種山	稲種を山に置く	△	○	△
	神前郡	聖岡の里	我慢比べ（聖・屎）をする	×	○	○
出雲国	飯石郡	多祢郷	稲種を落とす	×	○	○
伊予国		温泉	オホナムチが温泉を用いてスクナビコナを助ける	○	○	△
(参)尾張国		登々川	二神が足跡を残す	○	○	○
(参)伊豆国		温泉	二神が薬・温泉の術を定め、温泉を造る	○	×	△
(参)丹後国		凡海	島を集めて大きい島を造る	○	×	○
合計：○数（○+△数）				4 (5)	5	4 (8)

図二 『風土記』の二神説話における特徴の傾向

ここまでのことを踏まえると、『風土記』における二神説話の特徴として二つのことが挙げられる。

第一に、二神が融合した形で登場する『播磨国風土記』飾磨郡宮丘の記事以外、「土地の造形」「物・痕跡を残す」のどちらかの特徴が見える。この特徴は『風土記』においても、二神が国作り神として描かれていることを表していると言える。しかし、二神が造形した土地も残した物・痕跡も、農耕・医療関係なくあり、多様である。また、「物・痕跡を残す」特徴は、(参考)の『風土記』逸文以外では必ず見える。したがって、物・痕跡を残す特徴は土地の造形の特徴に比べ、『風土記』の二神説話の特徴をより表していると言えよう。

このことを踏まえ「土地の造形」「物・痕跡を残す」特徴をまとめると、『風土記』の二神は土地に何かをもたらし存在として描かれているのである。

なお、先学にて二神が土地を命名した存在として描かれていることが指摘されている。しかし、土地の名に関わっている様子は描かれているが、二神が国讃めをするなどの描写はない。土地の命名に二神が関わったことは明らかだが、二神が直接命名する存在として描かれていないと考えられよう。

第二は、二神が移動する存在として描かれていることであ

り、この特徴が『風土記』の二神説話の重要な要素だと考えられる。

理由として、まず、第一に挙げた特徴に該当する記事(『播磨国風土記』神前郡聖岡里・「出雲国風土記」飯石郡多祢郷など)の中には、二神が意図して土地を造形したり、物・痕跡を残したりしたとは限らない場合があることが挙げられる。このような記事の場合、二神の意志で行ったことは移動のみであり、二神はどこからかやって来て、どこかへ去っていく存在とも取れる内容となっている。また、二神が融合した形で登場する記事にも移動の可能性が見える。

以上から、『風土記』では二神をある地から別の地へと移動し、何かをもたらし存在として描いていると考えられる。

四 二神説話と単独説話との差異

前節にて、『風土記』における二神説話ではオホナムチとスクナビコナは土地に何かをもたらし(「土地の造形」「物・痕跡を残す」)国作りをした存在として、また、「移動」する存在として描かれていることを指摘した。

しかし、『風土記』には二神説話以外に、オホナムチとスク

ナビコナが各々単独で登場する説話があり、スクナビコナは一記事、オホナムチは四十四記事見える。とくに、オホナムチ単独説話は二神説話と同じく、国作りをする記事が見えることが指摘されている。したがって、先に指摘した二神説話の特徴は、単独説話においても同様の特徴が見える可能性がある。

このことから、本節では二神説話に見えた特徴が特有のものであるのか、オホナムチが単独で登場する説話にも見える場合、どのような差異が見えるのかについて考察を行う。なお、二神説話にていずれの記事にも見えた特徴である「移動」を軸として行う。

さて、単独説話は四十四記事のうち、『播磨国風土記』は五記事であり、『出雲国風土記』は三十七記事、『風土記』逸文は二記事である。このうち、最も記事数が多い『出雲国風土記』の単独説話の傾向について、『解説出雲国風土記』では以下のように指摘する^(注12)。

『風土記』に見えるオオナムチの神話から浮かび上がる行動パターンは次のように整理されている。

- ① 巡行天下 ② 国讃め ③ 耕種 ④ 狩猟 ⑤ 和平
 - ⑥ 追伐 ⑦ 妻問 ⑧ 愛情 ⑨ 神宝 ⑩ 国土献上
- これらのエピソードはいずれも広い意味での出雲の「天

下作り」に関わってくるだろう。

ここでは単独説話について、十の傾向を挙げている。その傾向の一つに「①巡行天下」が挙げられており、単独説話においても移動の特徴が見えることが分かる。

しかし、『出雲国風土記』の単独説話の移動については永藤靖氏が以下のように、政治的な目的を指摘する^(注13)。

この神はその性格の一部に軍神の面影を持っている。(中略) その本質は、土地を巡り、その土着の女神と通婚して、みずからの判図を拡大していった政治的な神であった。

永藤氏の指摘を踏まえると、単独説話における移動には政治的な目的があると考えられる。

これらの指摘は共に『出雲国風土記』の単独説話に限ったことである。『風土記』全体の単独説話についての指摘ではないが、以上を踏まえ、図三^(注14)にて単独説話の傾向を分類する。各項目は『解説出雲国風土記』に指摘されたパターンを踏まえたものであり、一部変更したものもある。

なお、網掛けがある項目は二神説話にも見られた特徴である。妻問は二神説話にも見えた特徴であるが、『播磨国風土記』飾磨郡宮丘の記事にのみ見えること、この記事では二神が融合した形で登場するなど例外的な要素を含んでいることから、本

	播磨	出雲	逸文
農耕	・飾磨郡十四の丘 ・揖保郡御橋山 ・賀毛郡碓居谷、箕谷、酒屋谷 ・賀毛郡飯盛嵩 ・賀毛郡梗岡 5件／5件	・楯縫郡玖潭郷 ・神門郡稲積山 ・神門郡稲山 ・仁多郡三処郷 4件／37件	
医療			・(参)伯耆国白兔 1件／2件
移動 (妻問関係 は除く)	・飾磨郡十四の丘 1件／5件	・意宇郡母理郷 ・意宇郡拝志郷 ・意宇郡穴道郷 ・楯縫郡玖潭郷 ・仁多郡布勢郷 ・仁多郡三津郷 ・大原郡来次郷 7件／37件	
物・痕跡	・飾磨郡十四の丘 ・揖保郡御橋山 ・賀毛郡碓居谷、箕谷、酒屋谷 3件／5件	・神門郡八野郷 ・神門郡稲積山 ・神門郡稲山 ・神門郡冠山 ・大原郡神原郷 ・大原郡屋裏郷 ・神門郡高岸郷 ・神門郡陰山 ・神門郡杵山 ・飯石郡琴引山 ・大原郡屋代郷 ・大原郡城名樋山 12件／37件	
土地の造形	・飾磨郡十四の丘 1件／5件		
狩猟		・意宇郡穴道郷 1件／37件	
御子神	・飾磨郡十四の丘 1件／5件	・意宇郡山代郷 ・意宇郡賀茂の神戸 ・島根郡美保郷 ・出雲郡美談郷 ・神門郡高岸郷 ・神門郡多伎郷 ・仁多郡三津郷 7件／37件	・土左国高賀茂大社 1件／2件
妻問		・島根郡美保郷 ・出雲郡宇賀郷 ・神門郡朝山郷 ・神門郡八野郷 ・神門郡滑狭郷 5件／37件	
国讃め		・意宇郡拝志郷 ・島根郡手染郷 ・楯縫郡玖潭郷 ・神門郡滑狭郷 ・仁多郡郡名 ・仁多郡三処郷 6件／37件	
戦・和平		・意宇郡母理郷 ・意宇郡拝志郷 ・大原郡来次郷 ・大原郡城名樋山 4件／37件	
鎮座・祀る 関連	・賀毛郡飯盛嵩 ・賀毛郡梗岡 2件／5件	・意宇郡母理郷 ・意宇郡出雲の神戸 ・楯縫郡郡名 ・出雲郡杵築郷 ・出雲郡出雲の御崎山 ・神門郡吉栗山 ・神門郡□□山 ・飯石郡三屋郷 8件／37件	

図三 『風土記』の単独説話の傾向

稿では分けて扱う。

まず、二神説話では、いずれの記事にも見られた移動は、単独説話では播磨に一記事、出雲に七記事の全八記事である。このことから、移動は一部の記事に限った特徴であると言える。

また、鎮座・祀る関連の記事が播磨に二記事、出雲に八記事見え、移動とほぼ同数見える。鎮座・祀るという内容の記事は、オホナムチがその地に滞在する存在として描かれていることを示していると言える。したがって、移動とは逆の特徴を持つ記事も単独説話では確認できるのである。

次に、土地の造形は播磨に一記事のみ見える。この記事ではオホナムチの御子神が登場し、その御子神が暴れ、オホナムチの所有物が散らばったことにより、丘が造形されるのである。そのため、この記事は二神説話に比べ、オホナムチの土地の造形への関与の度合は低いと言える。以上から、土地の造形に關しても二神説話と単独説話とは傾向が異なることが分かる。

一方、物・痕跡を残すことに関しては播磨に三記事、出雲に十二記事の全十五記事ある。記事数のみに着目すると、二神の説話と単独説話との差異はあまり見られないと言える。

このほか、永藤氏が指摘しているとおり、主に出雲において、妻問・国讃め・戦・和平などの政治的な内容が複数見られる。

以上を踏まえ、単独説話本文を見る。なお、四十四記事と数が多いことから数例を挙げて検討する。

まず、移動の記事を見る。これらの記事は移動以外の傾向を持つ記事が複数あることから、図三の項目を元に分けて挙げる。

① 戦・和平、狩猟

(1) 『出雲国風土記』意宇郡母理郷

天の下所造らしし大神、大穴持命、越の八口を平げ賜ひて還り坐しし時、長江山に來坐して詔りたまひしく「我が造り坐して命らす国は、皇御孫の命、平けく世知らせと依せ奉る。但、八雲立出雲国のみは、我が静まり坐す国と、青垣山廻らし賜ひて、玉珍置き賜ひて守らむ」と詔りたまひき。

(2) 『出雲国風土記』意宇郡拜志郷

天の下所造らしし大神、越の八口を平げむと為て幸しし時、此処の樹林茂盛れり。尔の時詔りたまひしく、「吾が御心の波夜志」と詔りたまひき。

(3) 『出雲国風土記』意宇郡宍道郷

天の下所造らしし大神の命の追ひ給ひし猪の像、南の山に二つ有り。

(4) 『出雲国風土記』大原郡來次郷

天の下所造らしし大神命詔りたまひしく、「八十神は、青垣山の裏に置かじ」と詔りたまひて、追ひ廢ひたまふ時、此処に追次に坐しき。

②国讀め、鎮座

(1) 『出雲国風土記』意宇郡 母理郷

(2) 『出雲国風土記』意宇郡 拝志郷

(3) 『出雲国風土記』栢縫郡 玖潭郷

天の下所造らしし大神の命、天の御飯田の御倉造り給はむ処を、覺ぎ巡行り給ひき。その時、「波夜佐雨、久多美の山」と詔り給ひき。

③その他

(1) 『播磨国風土記』飾磨郡 十四の丘

昔、大汝命の子、火明命、心行甚強し。是を以て、父神患へて、遁れ棄てむと欲ほしき。因達の神山に到りて、其の子を遣りて水を汲ましめ、還らぬ以前に、発船して遁れ去りたまひき。

(2) 『出雲国風土記』仁多郡 三津郷

大神大穴持命の御子、阿遲須伎高日子命、御須髪八握に生ふるまで、昼夜哭き坐して、辞通はざりき。その時、御祖命、御子を船に乘せて、八十嶋を率巡りて、宇良加

志給へども、猶哭くこと止まずありき。

(3) 『出雲国風土記』仁多郡 布勢郷

古老の伝へて云はく、大神命の宿り坐しし処なり。

①戦・和平、狩猟を伴う記事は四記事ある。(1)では、オホナムチは越の八口を平定して帰ってきたのち、長江山に移動し、国譲りを宣言をする。ここでは出雲↓越の八口、越の八口↓長江山の二つの移動が見える。(2)では越の八口の平定を目的として移動している際に、意宇郡拝志郷を訪れており、出発地点↓意宇郡拝志郷↓越の八口といった移動が想定される。(3)はオホナムチが猪を追いかけており、(4)は八十神を追いかけたところから、出発地点↓対象の逃走地点への移動が見てとれる。

一方、これらの記事ではその記述から、八口の平定・国譲り・猪の狩猟・八十神の追伐といった目的を伴う移動である。したがって、これらの記事のオホナムチは戦・和平などが目的であり、移動はあくまでも目的を果たすための手段なのである。

次に②国讀め、鎮座を伴う記事を見る。②の記事は①と共通する記事を含め、三記事見える。(1)(2)は先述したとおりであり、(3)は天の御飯田の倉を造る場所を求めて移動していた際に訪れたとある。したがって、②においてもオホナムチの移動は①と同様に目的を果たすための手段である。

また、(1)ではオホナムチが、出雲は自身が占める国だと発言しており、(2)(3)は『吾が御心の波夜志』『波夜佐雨、久多美の山』と国讀めをする。これらの行為は移動と関係はないが、その地域を支配する存在としてのオホナムチが描かれている。

このほかの移動が見られる記事は、③に挙げているとおり、三記事見える。このうち、(1)(2)では御子神から逃れるためや泣き止まずために移動しており、目的を伴った移動である。一方、(3)はオホナムチが泊まったとあり、ある地点から仁多郡布勢郷に移動した様子以外は描かれず、二神説話と同じ傾向だと言える。しかし、全体としては、単独説話における移動は、目的を達するための手段として描かれているのである。

以上、単独説話における移動を見てきた。先に指摘したとおり、単独説話では移動に関する記事が一部に限られており、鎮座・祀るといった、その土地に滞在する内容の記事が同数見られる。また、移動する場合、目的を伴うものであり、その中には鎮座に関するものもある。

つまり、単独説話では、オホナムチは移動する存在ではなく、滞在する存在として描かれ、目的がある時に移動する存在なのである。

この傾向は、物・痕跡を残す特徴においても同様である。以

下、本文を挙げる。なお、これに該当する『出雲国風土記』神門郡の山々の記事はまとめて挙げる。

(1)『播磨国風土記』飾磨郡十四の丘

昔、大汝命の子、火明命、心行甚強し。是を以て、父神患へて、通れ棄てむと欲ほしき。因達の神山に到りて、其の子を遣りて水を汲ましめ、還らぬ以前に、発船して通れ去りたまひき。是に、火明命、水を汲みて還り来て、船の発ち去るを見たまふ。即ち大きに瞋怒りたまふ。仍りて風波を起こし、其の船を追ひ迫めたまふ。是に、父神の船、進行く能はずて、遂に打ち破らえき。所以に、其は波丘、琴落ちし処は、琴神の丘と号け、箱落ちし処は、箱丘と号け、梳匣落ちし処は、匣丘と号け、箕落ちし処は、箕形丘と号け、甕落ちし処は、甕丘と曰ひ、稻落ちし処は、稻牟礼丘と号け、冑落ちし処は、冑丘と号け、沈石落ちし処は、沈石丘と号け、網落ちし処は、藤丘と号け、鹿落ちし処は、鹿丘と号け、犬落ちし処は、犬丘と号け、蛭子落ちし処は、日女道丘と号けき。

(2)『播磨国風土記』揖保郡御橋山

大汝命、俵を積みて橋を立てたまひき。山の石橋に似たり。

(3)『播磨国風土記』賀毛郡碓居谷、箕谷、酒屋谷

下鴨の里に、碓居谷、箕谷、酒屋谷有り。此は大汝命、碓を造り稲春きたまひし処は、碓居谷と号け、箕置きたまひし処は、箕谷と号け、酒屋を造りたまひし処は、酒屋谷と号け。

(4) 『出雲国風土記』 神門郡 八野郷

須佐能袁命の御子、八野若日女命坐しき。その時、天の下所造らしし大神、大穴持命、娶ひ給はむと為て、屋を造らしめ給ひき。

(5) 『出雲国風土記』 神門郡 高岸郷

天の下所造らしし大神の御子、阿遲須枳高日子命、甚く昼夜哭き坐しき。仍りて、其の処に高屋造りて坐せき。高橋を建てて登り降らせて、養し奉りき。

(6) 『出雲国風土記』 神門郡 山々

稲積山。郡家の東南五里七十六歩。大神の稲積なり。
陰山。郡家の東南五里八十六歩。大神の御陰なり。
稲山。郡家の東南五里一百十六歩。東に樹林在り。三つの方は並びに磯なり。大神の御稲なり。
杵山。郡家の東南五里二百五十六歩。南と西は並びに樹林在り。東と北は並びに磯なり。大神の御杵なり。
冠山。郡家の東南五里二百五十六歩。大神の御冠なり。

(7) 『出雲国風土記』 飯石郡 琴引山

古老伝へて云はく、此の山の峰に窟有り。裏に天の下所造らしし大神の御琴あり。

(8) 『出雲国風土記』 大原郡 神原郷

古老伝へて云はく、天の下所造らしし大神の御財を積み置き給ひし処なり。

(9) 『出雲国風土記』 大原郡 屋代郷

天の下所造らしし大神の塚立て射たまひし処なり。

(10) 『出雲国風土記』 大原郡 屋裏郷

古老伝へて云はく、天の下所造らしし大神、笑を殖て令め給ひし処なり。

(11) 『出雲国風土記』 大原郡 城名樋山

天の下所造らしし大神、大穴持命、八十神を伐たむと為て城を造りき。

まず、(2)から(5)、(9)から(11)の記事ではオホナムチが残した物・痕跡は、橋や酒屋・高屋・城など建築物である。建築物を造ることから、ある一定の期間そこを拠点として滞在したことが考えられる。また、(4)(5)などは女神との結婚や御子神の養育などを目的としており、建築物の完成後も滞在したと考えられる。次に(1)(2)、(6)から(8)の記事の場合はオホナムチの所持品、あ

るいはそう思しき物である。(1)の場合、意図して置いたものではないが、他の物はオホナムチが意図して置いたと思われる。

所有物を自らの意志で置く場合、廃棄を除き、所有主はその周辺地域を拠点として活動すると考えられる。このことから、物・痕跡を残すという内容の記事においても、単独説話ではオホナムチは滞在した存在として描かれていると言えるのである。

以上を踏まえ、二神説話と単独説話の差異をまとめる。

まず、二神説話では「移動」の特徴が見え、単独説話では「滞在」の特徴が見える。単独説話においても移動の記事はあるが、一部に限られる。そして、その移動には目的が見えるほか、滞在に関する記述もある。つまり、単独説話ではオホナムチは滞在する存在であり、移動には目的を伴うのである。

このほか、土地の造形は単独説話ではほぼ見えない。物・痕跡を残す特徴は同数見えるが、単独説話では建築物や所有物である。このことから、単独説話のオホナムチは、その地域を拠点として活動する存在として描かれているのである。一方、二神説話では二神が残したものは足跡や屎・聖と所有物ではなく、二神がその地域を拠点としていたとは考えにくい。

したがって、二神説話と単独説話の差異は、二神説話の二神は移動する存在であるのに対し、単独説話のオホナムチは滞在

する存在であることである。

五 おわりに

最後に本稿をまとめる。

まず、『風土記』におけるオホナムチ・スクナビコナ説話の特徴は、オホナムチとスクナビコナはある地から別の地へと移動し、訪れた地に何かをもたらす存在として描かれていることである。なお、先学では農耕および医療との関わりを指摘されているが、もたらしものは農耕や医療に関わるものとは限らない。

次に、『風土記』におけるオホナムチ・スクナビコナ説話とオホナムチ単独説話との差異は、移動する存在として描かれているか、滞在する存在として描かれているかという点である。オホナムチ単独説話では鎮座や祀られる記事が見えることから、オホナムチは滞在する存在として描かれている。移動する記事も見えるが、あくまでも拠点があり、和平や国讃などの目的があつての移動なのである。

つまり、オホナムチ・スクナビコナ説話のオホナムチとスクナビコナは、どこからかやって来て、訪れた地で何かをもたら

して去って行く存在であり、オホナムチ単独説話のオホナムチは、その地域の支配者として各地を巡る存在なのである。

注1 飯田勇「スクナビコナ」(大林太良・吉田敦彦編『日本神話事典』一九九七年、大和書房)

2 森昌文「国作り神話」(注1前掲書)

3 『風土記』逸文には、疑惑のある記事もある。本稿ではそれらの記事も考察対象とするが、該当記事は(参)(参考)と表記し区別する。表記する記事は、武田祐吉氏・秋本吉郎氏・廣岡義隆氏ら、一名以上が認めたといえるものである。

4 大林太良「出雲神話における『土地の主』—オオナムチとスクナヒコナ—」(『文学』三三、一九六五年六月)

5 注2に同じ。

6 『伯耆国風土記』逸文は、二神が各々単独で登場する記事であり、共に登場する記事はない。

7 阪下圭八「スクナビコナ」(『古事記の語り口—起源・命名・神話—』二〇〇二年、笠間書院「初出一九六八年四月」)

8 島根県古代文化センター編「オオナムチとスクナヒコナ」

(『解説出雲国風土記』、二〇一四年、今井出版)

9 オオナムチがスクナビコナを助けた説とスクナビコナがオオナムチを助けた説がある。本稿は引用元の記述に従う。

10 以下、既に本文を挙げた記事は該当部分のみ挙げる。

11 二神が融合した形であるこの表記は、二神説と二神融合の一神説がある。本稿ではどちらであるか断定しない。

12 島根県古代文化センター編「所造天下神」(注8前掲書)

13 永藤靖「『出雲国風土記』と空間意識」(『風土記の世界と日本の古代』一九九一年、大和書房「初出一九八九年三月」)

14 記事の地名の表記は引用元の記述に従う。なお、仁多郡三津郷は三澤郷と校訂される場合が多く、神門郡□□山(□は欠字)は一説に宇比多伎山とある。

* 『風土記』の引用は中村啓信 監修『風土記 現代語訳付き』上下(二〇一五年、KADOKAWA)による。傍線などは論者によるほか、一部漢字は便宜上、変更している場合がある。
* 本稿は、ノートルダム清心女子大学日本語日本文学会(二〇二二年六月十三日 於・本学)の口頭発表に基づく。発表に際し御教示を賜りました方々に、厚く御礼申し上げます。

(すえもり ひろみ／本学大学院博士前期課程)

キーワードⅡ 風土記・オホナムチ・スクナビコナ